

Requested Patent JP62036304A
Title: COSMETIC ;
Abstracted Patent: JP62036304 ;
Publication Date: 1987-02-17 ;
Inventor(s): MIZUMAKI KATSUMI ;
Applicant(s): KASHIWA KAGAKU KOGYO:KK ;
Application Number: JP19850122134 19850805 ;
Priority Number(s): ;
IPC Classification: A61K7/00 ;

Equivalents:**ABSTRACT:**

PURPOSE: To obtain a cosmetic for cleaning and moisturizing the skin and hair and maintaining the skin in healthy state, by compounding a cosmetic with soya milk and more than a specific amount of a surfactant based on the solid component of the soya milk.

CONSTITUTION: The objective cosmetic can be produced by compounding a cosmetic base with soya milk and then adding /FONT

Best Available Copy

特開昭62-36304(2)

レシチンを含有する脂質化粧品が知られている。

伝統的興味から牛乳風呂を仕立てたり、豆腐の残粕（雪花膏）で洗顔すると白くなるといった民間での使用例は聞いたことがある。

(作 用)

本発明者が豆乳を化粧品として使用してみたところ、予想し得ない数々の効果が認められた。

1) 水分を付加する効果

カサカサに乾いた皮膚は老化を迅速するといわれるが、豆乳はその含有成分により、水分を與えかつ適度の水分を保持する作用を有する。皮膚の水分を測定するモイスチャーメーターにより、20名の服用者に適用したデータを第1表に示す。

第1表

	フロント	水にて拭く	豆乳にて拭く
顔 部			
30分後	19~26	22~29	23~28
2 時間後	18~24	19~22	20~25
上膊部			
30分後	23~32	25~30	26~32
2 時間後	21~30	21~30	24~32
掌甲部			
30分後	16~24	18~28	20~30
2 時間後	14~26	14~26	18~29

2) 光沢感を與える効果

皮膚また顔面に豆乳を塗布し、しかる入浴するかシャワーにより除去した後はしっとりとした光沢感を感得する。塗布処理を行わないものと同時に比較すると明らかに異なった感得であった。この感得は科学的データにて表現出来ない面があるが、海馬参のアンケートにより認識される。第2表は家庭用 180 浴槽で豆乳を 1.8 加入入浴させた際の結果である。

第2表

実験者の構成	6~12才	13~18才	19~25才	27~35才	36~55才	56才以上	計
男子 (人)	3	7	8	9	23	9	59
女子 (人)	5	6	12	14	18	6	61
計	8	13	20	23	41	15	120

アンケート結果

	良とする	中庸である	不可とする	無回答
形態について	容のキメが細かい 77	普通で変らない 10	かえって不可である 12	判らない 21
入 浴 時	湯あたりがよい 90	別に変らない 3	きもちが悪い 9	不回答 18
石鹸で洗う	泡立ちがよい 85	別に変らない 14	汚れがとれない 4	不 明 16
湯上りの気分	ほかほかしている 94	別に変らない 9	かえって気分が悪い 10	判らない 7
肌の感触	すべすべした感じ 38	別などうという ことではない 4	さっぱりとしない 2	
	しっとりした感じ 55		乾燥の感じ 3	不 明 4
	むっちりとした感じ 25		ぬっとりした感じ 9	

特開昭62-36304(3)

また、頭髪のシャンプー時に豆乳を配合して行うと、後に整髪料を附したときギラギラした要蓋な感じではなく、滑らかな感じになる。

B) 汚れを落とす作用

豆乳には油脂分、サポニン、レシチン等がミックスされ、之等が親水性ならびにリポイド性汚れを除去するに役立つ。本発明者が石鹼と併用配合して実使用したところ、泡立ち・汚れの蓄積共によく、洗水を弱酸性下で観察すると豆乳の微粒子が汚れ粒子をとり囲んでいるのが見られる。この作用について考えてみると毛髪・皮膚共生体ではPH3.5～5.0と酸性側にあり、これに対してPH7.0～8.0で安定な豆乳のコロイドが酸性物質に相遇すると、豆乳コロイド粒子はこれを取込みつつ増大化する。酸性物質が多量でバランスが崩れたとき豆乳状スカムに凝縮するに至るが、活性剤で分散されるのでその界面層で汚れを取去ると考えられる。

実験A：オシロイ（原料配合物80.0%、ソルビト

ール4.0%、ソルビタンセスキオレート10.0%、ワセリン0.5%、流動パラフィン2.0%、プロピレングリコール2.5%、ヒマシ油1.0%）をスリガラスに一定に塗り試験片とする。実施例1の処方品（甲）とそれから豆乳を除き残量100.0%とした処方品（乙）との10倍希釈液に試験片を浸漬し、30分間横動し試験片を取り出し5回水洗する。試験実施前のスリガラスを基準として光の透過度の比率を測定したところ次の通りであった。

A : 97.7 %

B : 82.1 %

IV) その他の効果

前述の通り豆乳には必須アミノ酸、脂肪酸、レシチン、ビタミン類を多く含有するから、之が生体に外部から与えられたとしても頭皮、髪、皮膚をすこやかに保つ効果効果は充分推量出来るところである。

V) 毒性

豆乳は飲食したとき毒性は全く認められない。

B人の女性に毎朝10倍希釈の豆乳で洗頭させ、

92日間経過したが異常は全く認められていない。

以上説明により豆乳の効果効果は明したが、これを含有する化粧品類の実使用に当たって第一の問題は腐敗変質に関することであり、これは適切な化学薬剤の添加、滅菌処理の実施等の対応により解決出来る。

第二の問題は粕状（豆乳状に軟かく固まったもの——以下スカムと云う）の発生することである。即ち豆乳は電解質の存在で加熱時に凝固する性質のあることは周知のとおりである。これが凝固に至らず単に粒子が凝大結合する程度において汚れ分をインクルーズして除去することが特徴であるが、この凝度が著しく変化した状況下、例えば汗等の酸敗物質が多く残存する場合、ノーマップ類が多く附着している場合、硬水・温水を使用した場合、では凝固状態となりいわゆるスカムとなって皮膚また髪に残留する。スカム自体は美容効果に対し生理上特に悪影響はないとして

も、スカムが除去されないで附着した状態で人顔に出るわけにゆかない。従って化粧品においては、このスカムが凝固発生しないように工夫されねばならない。

本発明者はこの解決方法として具体的に界面活性剤の添加することを見出した。

実験B：市販豆乳（無添加：固形成分9.14%（105°、2g、3hr））10mlをビーカーにとり、水20mlと界面活性剤の各段用量を加え、次にCaCl₂・2H₂O 4/10g 10mlを加え全体を50mlとし、湯浴上で30分加熱する。濾布を以て濾過し、5分間水切りの濾紙布上に残ったスカム（含水のまゝ）を秤量する。結果は図面に示す。

本図において（A）は界面活性剤を加えない場合10g以上のスカムの発生がみられ（B）はCaCl₂を加えない場合である。界面活性剤（W、X、Y、Z）を加えた場合或る量にてスカムの発生を抑えることが可能であることを示す。図においての記号について使用した原料は次の通りである。

W：ノニオン型（418922967/25707-51-96）

特開昭62-36304(4)

X: カチオン型 (アトゲン27ミ、酢酸塩)

Y: ビイオン型 (アトゲン27ミ、酢酸塩)

Z: アニオン型 (アトゲン27ミ、酢酸塩)

最も効果の認められるのはノニオン型であり、豆乳に対し、0.2%以上で効果が認められ即ち豆乳の固形分当たり2%に相当する。

しかし更に CaCl₂ が多くなるとスカムは生成するので、界面活性剤を増量する必要があり、またコンプレキソン剤の併用が有効である。

本発明になる界面活性剤と豆乳とを含む化粧品を分析するには、界面活性剤は通常法で行い、豆乳は BaCl₂ を含有していると思われる豆乳量と等量以上に加水煮沸し沈降物の乾燥量とその灰化量の差を秤り、同時に豆乳について同様の操作を行ったものと比較することによって定量し得るし、更にN分を分析することによってより正確となる。

実施例1

シャンプーの処方

a 豆乳 (固形分8.74% 含有) 10.0W%

b	アトゲン27ミ	30.0
c	アトゲン27ミ	2.0
d	アトゲン27ミ	1.5
e	アトゲン27ミ	4.0
f	アトゲン27ミ	0.3
g	アトゲン27ミ	5.0
h	アトゲン27ミ	0.1
i	アトゲン27ミ	0.1
j	アトゲン27ミ	1.0
k	香料及び色素	2.3
l	精製水	45.9

予めjは20倍量の精製水に加え、加熱し攪拌し溶解させる。次いでb～eを加え、別にa、g、iと残余の精製水を混合した液を加え70℃附近に加熱しろ布を以て濾過し、f、h、k、を混合して製品を得た。本品は淡黄色パール状微粒子光沢を有する髪髪用シャンプーである。髪質を傷めことなく髪髪は完全に洗去され、水洗後ドライブローしたときしっとりした感触であった。また固まったスカムは全く発生せずしたがって洗髪

後その様な汚片は附着することはない。

実施例2

コールドクリームの場合

a	豆乳 (固形分9.07% 含有)	5.0W%
b	アトゲン27ミ	5.0
c	アトゲン27ミ	3.0
d	アトゲン27ミ	0.0
e	アトゲン27ミ	3.0
f	アトゲン27ミ	25.0
g	アトゲン27ミ	5.0
h	アトゲン27ミ	2.0
i	アトゲン27ミ	5.0
j	アトゲン27ミ	0.2
k	アトゲン27ミ	0.3
l	アトゲン27ミ	0.3
m	香料	0.2
n	精製水	40.0

b～hを混合しAとし、a、i～l、mを混合しBとし、両者50℃に加熱してBの中へAを投入する。次いでnを加えよく攪拌しクリームとする。本品は皮膚に塗布したとき清涼感があり、クリー

ムのきめは細かく感触がよく、分離することはない。取替後下眼帯で各粒子は均一に置っており、保存中にスカムを生ずることはない。

実施例3

ローション (乾性皮膚用) の例

a	豆乳 (固形分9.07% 含有)	3.5W%
b	アトゲン27ミ	2.0
c	アトゲン27ミ	0.5
d	アトゲン27ミ (70%)	2.0
e	アトゲン27ミ	2.0
f	アトゲン27ミ	1.5
g	アトゲン27ミ	0.2
h	アトゲン27ミ	0.5
i	アトゲン27ミ	0.2
j	アトゲン27ミ	0.5
k	香料	適宜
l	精製水	加えて100とする

a～lを混合し、瓶に充填密封し製品とする。本品は豆乳を含むバニシング系ハンドローションである。主婦や職業上水を扱う家庭婦は、皮膚の角

特開昭62-36304(5)

質層に含まれている水溶性水分が失われ皮膚が荒れ易い。本品は豆乳含有成分によってそれを補うを目的とするが、豆乳乳化粒子が粗大スカムとなつてはその効果を失うので、その他の配合により微粒に分散を保つ工夫がされている。

実施例 4

ヘアローション(リンス)の例

処方

a 豆乳(固形分92%)	5.0W%
b 6988991967ノニオン	1.0
c レシツ	0.2
d ヒマ油	2.0
e エチル油	2.0
f 7847酸Na	0.1
g 7837-6(90%)	40.0
h 1989991967	1.0
i T 本油	0.2
j 水	0.2
k 精製水	48.3

先づfをg, kの順に50℃に加熱しよく溶解し、

a, b, c, j, h, i, d, eの順に混合して成る。一般にこの様なアルコール水をベースとした場合c, d, eの多量配合は分離を生ずるが、a, bの配合により乳化状になって安定である。本品は頭皮のバサツキを防ぎ柔軟性を与え、かつフケ、カユミの発生を抑える。

また、とくにパーマネントウェーブ、染毛処理を行った毛髪の変質に有効である。即ちこれらの処理薬剤は洗髪後とはいえ微量存在し毛質を傷めるが、本品でローションをすることにより処理薬剤は豆乳と作用するので髪は保全される。

実施例 5

浴用剤の例

a 豆乳(固形分14.7%)	60.0W%
b Na79991967	5.0
c 6988991967ノニオン	5.0
d 19899	0.5
e エチル酸Na	0.5
f 799991967(他の色素で代用得)	0.2
g 香料	0.5

h 精製水 28.83

a~hを混合し溶解して製品とする。本品180mlを家庭用浴槽180lに1割分として使用する。使用量を多くすれば著しく発泡し様式また特殊向浴用剤となり、浴槽中に湯垢が生じない。

(効果)

本発明は化粧料として即ちシャンプー、リンス等の洗髪・髪変化粧品、アフターシェービングローション、ハンドローション等の一般化粧水類、クレンジングクリーム・シェービングクリーム・コールドクリーム等のクリーム乳液類、パック用化粧料、ファンデーション類、浴用化粧品類、洗顔料類、石鹸類等広範囲に適用し得、使用後皮膚・頭皮清浄にしかつうるおい與えすやかに保つ効果がある。

図面の簡単な説明

図面は豆乳のスカムの形成を抑制するために、界面活性剤の添加が効果のあることを示す実験値をグラフ化したものであり、横軸に界面活性剤の

添加量ととり、縦軸にスカムの発生量をとって表した。

実験条件は詳細な説明中に記載の通りである。

- A: 界面活性剤を加えないで CaCl₂ を加えた場合
- B: 界面活性剤を加えないで CaCl₂ も加えない場合
- W: ノニオン型界面活性剤を加えた場合
- X: カチオン型界面活性剤を加えた場合
- Y: 両性型界面活性剤を加えた場合
- Z: アニオン型界面活性剤を加えた場合

出 願 人 株式会社 柏化学工業



特開第62-36304(公)

手続補正書 (自発)

昭和61年 7月 16日

特許庁長官 殿

1. 事件の表示

特許第 昭和60年122134号

2. 発明の名称

アロウ・リウ
化粧料

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

住所 東京都中央区日本橋小町町8番4号

氏名 株式会社 松化学工業

代表者 橋本 昌雄

4. 補正の対象

明細書の一部

5. 補正の内容



手続補正書

昭和61年 8月 5日

特許庁長官 手 夏 通 閣下

1. 事件の表示

昭和60年特許第122134号

2. 発明の名称

化粧料

3. 補正をする者

事件との関係

特許出願人

住所

東京都中央区日本橋小町町8番4号

氏名

株式会社 松化学工業
代表者 橋本 昌雄

4. 補正命令の日付

昭和61年 8月18日

5. 補正により増加する発明の数

なし

6. 補正の対象

「昭和61年 7月16日付発出の手続補正書の補正の対象
の欄」

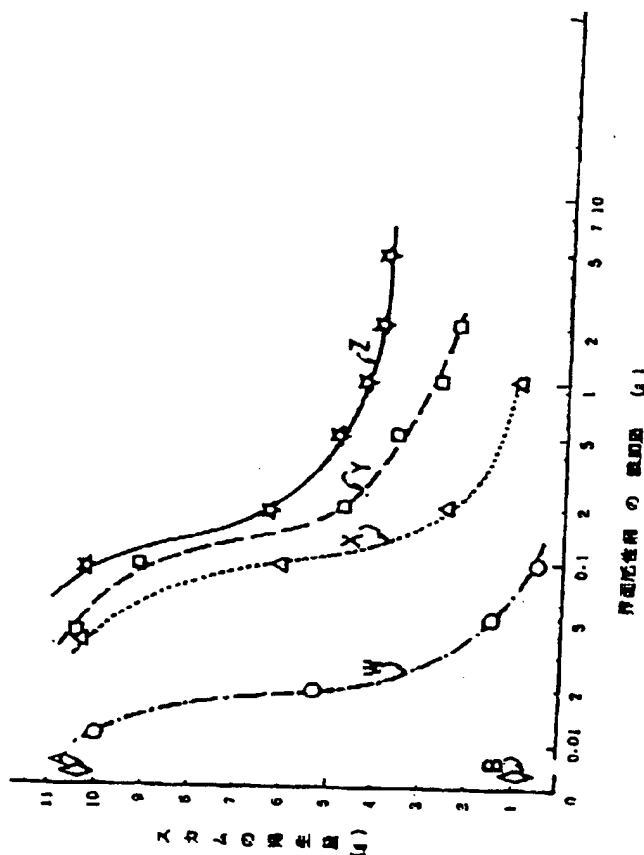
7. 補正の内容

別紙のとおり



特許庁
61.9.6
H.M.

方大
審
査



(1) 明細書第2頁第14行中「水分」を次記のとおり訂正する。

記

原文

(2) 明細書第7頁第10行、第11行の「A」、B」を次記のとおり訂正する。

記

甲:

乙:

(3) 明細書第9頁第6行と第7行との間に次記の文章を挿入する。

記

原乳は前記の様に水分が高いので、取扱い上の便と品質の点を考慮して、乾燥品を用いてよい。互乳乾燥物の分析例として、固形質40〜45%、脂肪15〜18%、灰分10〜12%、水分4〜5%、水分1〜10%が普通である。

(4) 明細書第14頁第1行中「水分」を次記のとおり訂正する。

記

成分

(5) 明細書第14頁第9行に次記のごとく1中挿入する。

記

a. 互乳質 (固形分92%)

b. 8%乳

以上

特開昭62-36304(7)

手続補正書

昭和61年 7月10日

特許庁長官 千 賀 誠 郵政

1. 事件の表示 昭和60年特許第122124号

2. 発明の名称 化粧料

3. 補正する者

事件との関係 特許出願人

住 所 東京都中央区日本橋小町南6番4号

任 務 株式会社 昭和化学工業

代表者 佐 藤 昌 雄

4. 補正の対象

明細書「発明の詳細な説明」の欄

5. 補正の内容

表紙の裏う

**This Page is Inserted by IFW Indexing and Scanning
Operations and is not part of the Official Record**

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images include but are not limited to the items checked:

- ☐ **BLACK BORDERS**
- ☐ **IMAGE CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES**
- ☐ **FADED TEXT OR DRAWING**
- ☐ **BLURRED OR ILLEGIBLE TEXT OR DRAWING**
- ☐ **SKEWED/SLANTED IMAGES**
- ☐ **COLOR OR BLACK AND WHITE PHOTOGRAPHS**
- ☐ **GRAY SCALE DOCUMENTS**
- ☐ **LINES OR MARKS ON ORIGINAL DOCUMENT**
- ☐ **REFERENCE(S) OR EXHIBIT(S) SUBMITTED ARE POOR QUALITY**
- ☐ **OTHER:** _____

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

As rescanning these documents will not correct the image problems checked, please do not report these problems to the IFW Image Problem Mailbox.